慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	G・D・H・コール, その人と業績 : 最近の追憶から
Sub Title	G. D. H. Cole, his life and works
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.9 (1960. 9) ,p.777(39)- 786(48)
JaLC DOI	10.14991/001.19600901-0039
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600901-0039

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の問題との抵触を避けることも理由と考えられる。

（注39）最近ADRの発行について、モルガン・ギャランティー・トラスト、ケミカル・バンク、アービング・トラストなど米証券受託機関は、日本政府の決定次第発行できる準備を行なっていると云われる（日経、八月一八日参照）。また、今年末頃、三菱電機がアメリカのキダピーボディ社を通じて株式引受権付社債五〇〇万ドルを期間一五年、発行者利廻り八％位で発行すると伝えられる（読売、八月二六日）。

（注40）資本取引自由化と株式市場、一〇頁以下。Monatsberichte der Deutschen Bundesbank, Dezember, 1959.

（注41）日本経済新聞、朝日新聞、七月二日参照。

（注42）日本経済新聞、七月一二日参照。

（注43）日本経済新聞、七月一二日参照。日経の六月二四日に邦銀ロンドン支店のドル預金が一億ドルを越えたと報ぜられた。

（注44）日本銀行統計局、外国経済統計月報、昭和三五年七月号参照。拙稿、最近の米、英、西独の金融政策と国際短期資本の移動、中央経済、昭和三五年一〇月号参照。

（注45）西ドイツの好景気、ノイエ・チュルヒェル紙、一九六〇年六月一日、七月一七、二四日参照。

（注46）日本経済新聞、七月六日。

（注47）日本経済新聞、六月一四日、一八日、二四日、七月二日、その他参照。

（注48）日本経済新聞、七月五日、一二日参照。

（注49）ドルの直物相場が現在の円の対ドル相場の変動の上限三六一円八〇銭、先物（三ヵ月）相場が下限の三五八円二〇銭の場合に短期資金の流入があり、先物契約を行なえば $\frac{361.80-358.20}{360}\times\frac{12}{3}=0.04$ と年率四％の為替売買益が生ずる。

（注50）日本経済新聞、七月一日、二日参照。

（注51）日本経済新聞、四月八日参照。尚三五年七月末以来、産業界の資金需要が強いうえ、八月の財政資金の大幅引揚超過を控えて、銀行が資金手当を急いだためコール・レートは日歩二銭九厘となった。

（注52）日本銀行統計局、経済統計月報、昭和三五年六月、八七―八頁参照。

（注53）日本経済新聞、七月二九日、読売、産経、八月二六日参照。

追記　本邦為銀ロンドン支店のドル預金は八月末二億七〇〇万ドル、九月一五日二億二六〇〇万ドルと急増し、自由円預金も九月一五日に約五〇〇億円近くとなった。更に九月一日の外銀からの無担保短期借入金額の制限撤廃に伴い、為銀はその外貨を外国為替資金特別会計に売却して国内の円資金繰りに使用している。これらは国内金融市場の需給緩和に役立っているが、ドル預金獲得競争は激しくなり、ロンドンの金の自由相場の急騰、ドル預金の引揚げの如き事態によって国内金融市場が大きな影響を受ける可能性がある。

資料

G・D・H・コール、その人と業績

―最近の追憶から―

飯田鼎

一

昨年の一月一四日、G・D・H・コールがロンドンの病院で逝去したことを新聞で知ったとき、そのあまりに突然だったのにおどろくとともに、彼の最近の労作を注意深く見守っていたわたくしは、これによって、世界はまたひとりのすぐれた社会主義者、政治評論家を失ったという感慨におそわれたものである。ヴォルテールに匹敵するといわれる厖大な著作――そのなかには、おそらくはライフ・ワークとしてその完成を急いでいたであろう最後の労作「社会主義思想」（Socialist Thought, 7 Vols.）のような大部のものから、二、三〇ページのパンフレットにいたるまでをふくむ――それらの業績によって、コール教授がイギリス社会主義思想および理論の研究と普及に、偉大な貢献をしたことは、何人も異論がないであろう。

故コール教授の研究領域は、労働組合運動史、協同組合運動史、G・D・H・コール、その人と業績

社会主義思想史、社会思想史、社会経済史、社会学、政治学など、およそ社会科学と称せられるあらゆる部門に及び、その流麗な筆致と啓蒙的な文章のために、英本国でも多くの読者をもち、またわが国の研究者の間にも早くからその名を知られ、その主著のいくつかは邦訳されている。筆者も学生時代、英国労働運動史の研究をはじめるにあたり、まず手にしたのは、シドニー・ウェッブ夫妻の「労働組合運動史」とコール教授の「英国労働運動史」であった。そしてウェッブ夫妻の古典的にして、あまりにも史料的なのにおそれをなしていたとき、「英国労働運動史」三巻[1]は、英国社会史研究に立ち向かおうとしていた筆者にとって、どれほど大きな慰めとなったことか。まことにそれは恰好の入門書であった。その後、教授のつぎつぎに出された著書に、示唆をあたえられたことがいかに大きかったかを顧みるとき、筆者はただその学恩の深さに感謝するのみである。

最近、コール教授追悼論文集として、リーズ大学のアーサ・ブリ

ックス教授とバル大学講師ジョン・サヴィル氏の共同編集による「労働運動史論」が出版された。これには、コール教授と生前、関係が深かったと思われる人々によって書かれたイギリス労働運動および社会主義運動にかんするきわめて興味深い九篇の論文がおさめられているが、とりわけ巻頭にのせられているコール教授の面影を偲ぶ友人知己の文章が注目をひく。アイヴォア・ブラウン（Ivor Brown）は、今世紀初頭のオックスフォード、ベリオル・カレッジにおける生活のなかでの、若き日のコールとの交友を描き、また労働党首ゲイツケル（Hugh Gaitskell）は、第一次世界大戦前後におけるギルド社会主義の運動から、一九二六年、かの歴史的な大ストライキの頃までのコール夫妻のエピソードを簡潔にしるしている。そしてスティーヴン・ベイリー（Stephen K. Bailey）は、オックスフォードに入学を許可されたひとりのアメリカ人として、コールの信じ難いほどの博学、超人的な精力に驚嘆し、ワースウィック（G. D. N. Worswick）は、一九三八年から五八年までの晩年、コール教授とオックスフォードとの関係、その学者的生活とナフィールド・カレッジの経営などについてふれている。

コール教授の生活について書かれたものは、上記の追憶のほかには、寡聞な筆者の知る限りでは、夫人、マーガレット女史（Margaret Cole）の憶い出「革命のなかに成長して」[2]があるのみではなかろうか。筆者はここで、コール教授の半世紀になんなんとする多彩な生涯、ギルド社会主義運動の指導的なメンバーとして、あるいはまたいわゆる多元的国家論の主唱者のひとりとして、さらに社会主義研究家としての彼の活動を、すべての面から考察しようと意図するものではない。ただその長い学問的な遍歴のなかから生み出された多くの貴重な労作が、どのような現実的な課題に直面しつつ、それを解決しようとする苦闘の果に現われたものであるか、このようなコール教授の真理探求の飽くことを知らぬ熱情的にして真摯な態度に、深く敬意を表する意味において、このささやかなオビチュアリーを書き記すのである。

（1）A Short History of the British Working Class Movement, 1789-1927, 1927, 3 Vols.

（2）Margaret Cole; Growing up into Revolution, 1949.

二

G・D・H・コール教授の生涯は、大体つぎのようないくつかの時期にわけることができるのではないだろうか。すなわち、㈠オックスフォード大学の学生時代から第一次世界大戦後の一九二〇年まで、㈡一九二一年から一九三八年まで、㈢一九三九年から一九五九年まで。第一期は、コールが若くしてギルド社会主義の実践的運動に没入し、英国の労働者階級に革命的な労働組合理論を提供しつつあったのと、第一次世界大戦とロシア革命のもたらした混乱と衝撃によって、彼の理論的影響がうすれてゆき、これを契機として実際的な運動から遠ざかった時期である。第二期は、第一次大戦後から第二次世界大戦直前までの、コール自身にとっては社会主義理論および労働運動史の研究を中心として学問的精進をなしつつ、その間にナフィールド・カレッジの建設などに専心した時期であるが、他方客観的状勢としては世界資本主義体制の矛盾の深刻化にともなって、ファシズムの勢力が増大しつつあった。そしてまたこのときに、ケインズの一般理論があらわれて、彼の社会主義理論に大きな影響をあたえた。第三期は、第二次世界大戦の勃発から、晩年としての戦後にわたる時期であって、若いときよりもむしろ、この晩年において、非常に多くの力作が生み出されたといえよう。われわれはつぎに、よりくわしく、彼の生涯について考察することにしよう。

今世紀初頭、コールがオックスフォードの学生であった一九一〇年前後は、資本主義の矛盾が激化し、労働党の勝利と前進にもかかわらず国内および国外における保守党政府の帝国主義的反動政策の結果、労働者階級の実質賃金の低下、生活費の昂騰、これとは反比例的に利潤および地代の増大をもたらした時期に相当する。[1]政治上の輝かしい勝利と実際的な運動におけるいたましい敗北感（一九〇六年の労働党の前進と一九一〇年のオスボーンの判決とを対比せよ！）。これらが、いわゆる「産業上の大不安」として知られるサンディカリズムのイギリス労働運動への滲透の大きな原因のひとつであった。知識人の小さなグループ、たとえばA・R・オリッジ（A. R. Orage）S・G・ホブソン（S. G. Hobson）およびアーサー・ペンティ（Arthur Penty）等はこの状勢に呼応して、「新時代」誌上に、ギルド社会主義なる新運動を開始するに至ったのであって、わがG・D・H・コールもその重要なメンバーとして、ウィリアム・メロー（William Mellor）とともにこの運動に理論的な基礎を提供したものであるということができる。この運動は、中世的なギルド精神の強調という点で、ウィリアム・モリスの思想を想い起させ、労働者階級による産業の管理の理念をロバート・オーエンから学び、何よりもその戦闘的精神と具体的な戦術とを、フランスのサンディカリズムおよびアメリカの産業別組合主義からうけついだのである。若冠二五歳の青年コールによってまとめられた「労働の世界」（World of Labour, 1913）は、若き日の彼の比類稀な才能のひらめきを感じさせる力作といえよう。その後彼の思想は、「産業自治論」（Self-Government in Industry, 1917）に、より発展した形であらわれたのである。ギルド社会主義にかんする著作としては、このほかに「産業における混沌と秩序」（Chaos and Order in Industry, 1920）、「ギルド社会主義――経済的民主主義のためのプラン」（Guild Socialism; A Plan for Economic Democracy, 1920）、「再説ギルド社会主義」（Guild Socialism restated, 1920）などがある。集産主義すなわち、国家による生産手段の所有および管理に反対なコールの理論は、英国に固有な個人主義的色彩の強い多元的社会理論にも通ずるものであって、その「社会理論」（Social Theory, 1920）は、ハロルド・ラスキ（Hazold Laski）や

マッキーヴァ（MacIver）の業績とともに記憶されねばならない。

ギルド社会主義の運動を契機として、コール等がウェッブ夫妻の集産主義に反対したため、フェビアン協会内部に思想的な分裂がおこった。すなわち従来、労働党右派に強く結びついていたウェッブ夫妻が、第一次世界大戦の勃発に際して、政府の戦争政策を支持する態度を明らかにしたことは、参戦に最後まで批判的であった独立労働党に所属していた人々を刺激し、むしろギルド社会主義運動自体が、戦時中における左翼的な労働運動としての性格を強くもつに至った。とりわけ戦時下の産業休戦のもとにおいて、非公式の労働運動としての工場委員会（ショップ・スチュアート・ハーケット）の運動が、ガルラッハー（Willie Gallacher）、カークウッド（David Kirkwood）、ブキャナン（George Buchanan）などのような指導者によって盛んに行なわれ、またマルクス主義者やサンディカリストおよびギルド社会主義者とともに、労働運動における最左翼を形成し、政府の反動的な労働政策に抵抗した。

「ギルド社会主義の運動を分裂させたものは、ああ、ロシア革命の余波であった――われわれは最初、非常な喜びをもってすべてを歓呼したのだが」と、マーガレット・コール女史がのべているように[2]、一九一七年のロシア革命の勃発とこれにつづくヨーロッパの革命的諸状勢はイギリスの社会主義運動にとって一大転期をもたらしたのである。たとえば、一九一八年一一月から一二月までの約一カ月をとってみよう。

一一月一日　オーストリア革命の勃発。
同　月六日　ドイツ海軍の叛乱。
同　月七日　バヴァリア共和国の建設。
同　月九日　ドイツ革命勃発、スイスのゼネラル・ストライキ。
同月一〇日　オランダの労働争議。
同月一三日　デンマークの労働争議、スペインの革命的状勢。
同月一四日　労働党、連立政権を去る。
同月一七日　ハンガリア共和国の建設。
同月一八日　ポルトガルのゼネ・スト。
一二月一日　アルバート・ホールにおけるロンドンの労働者の示威運動。

このような革命的状勢に動揺した一九一九年、第一次世界大戦後の英国資本主義は、一方において経済的な危機と他方失業者の増加にともなう労働不安の深刻化によって、未曽有の危機にさらされ、このような状勢のもとに、ギルド社会主義の思想が労働組合をとらえ、コール等の指導する国民ギルド連盟による「生産者ギルド」による産業の管理は、きわめて短期間ではあったが、鉱山、機械および造船などの重要産業部門の労働者にある程度の影響を及ぼした。その意味では、戦争末期とともに戦後の一時期は、ギルド社会主義にとっては、たしかにひとつの「チャンス」ではあった。だがさきにのべたようにその後の状勢の変化、とくにショップ・スチュアート運動の衰亡と一九二〇年のイギリス共産党の建設によって、ギルド社会主義者のなかから共産党に入党する者も出てきた。そしてここに共産党と労働党のきわめて複雑な問題[3]が出現したのである。ともあれ一九二〇年を頂点として、ギルド社会主義の運動は、一方において昂まるボルシェヴィズムの熱狂、他方フェビアン主義者の国家社会主義の挟撃にあって、まったく勢いを失ってしまったといってよい。

ギルド社会主義運動の失敗を契機として、コールは実践運動から身をひき、その後はオックスフォード大学の運営と著述に専念するかたわら、「国際社会主義研究協会」（International Society for Socialists Studies）の創立者として社会主義知識層の指導にあたっていたといわれる[4]。事実、一九二〇年代におけるコールの業績のうち、もっとも注目すべきものは、「ロバート・オーエン」（Robert Owen, 1925）と「ウィリアム・コベットの生涯」（The Life of William Cobbett, 1927）および世界大恐慌の前夜ともいうべき一九二九年に出た「英国社会政策および経済政策における来る十年」（The Next Ten Years in the British Social and Economic Policy, 1929）であるが、とくにコベットの生涯に非常に興味を感じたといわれている。そのほかにもウィリアム・ラヴェット（William Lovett）、ダニエル・ディフォー（Daniel Defoe）やジョン・ウィルクス（John Wilkes）、ウィリアム・モリス（William Morris）やケーア・ハーディ（Keir Hardie）などの英国政治および社会史上の偉人にかんする伝記も非常に多く書いている。

一九二〇年代のコールは、オックスフォード大学において、政治理論、経済理論、経済制度、一八一五年以来の労働運動および社会経済史のチューターとして多忙な教育活動にたずさわりながらも、精力的な勉強をつづけていた。

しかし彼は書斎にともるたんなる一学究ではなく、啓蒙的大衆的活動にも関心をいだいたのであって、たとえば、探偵小説を書いたり、労働者や知識人向きの多くのパンフレットを書いたばかりでなく、フェビアン論集やニュー・ステーツマンの執筆者であったこともまたひろく知られている。一九二五年、彼は大学カレッジのフェロー（Fellow of University College）および経済学の講師（University Reader）となった。ワースウィックの語るところによれば、一九二五年以後一九三〇年代のコールは、オックスフォード大学の学生に非常に大きな影響力をもっており、毎週水曜日の夕方には、各カレッジの学生のなかで、コールに共鳴した人々が彼の部屋に集まり、いろいろな問題について熱心に学習し討論したのであって、このコール・グループの活動は、その後ずっとつづいたといわれる[5]。

彼が、多忙ではあったが、充実した研究生活をおくっていた一九二九年、ウォール街に勃発した金融恐慌は、三〇年代に至って全世界をおそい、経済的な大混乱がソヴェート・ロシアを除く世界の全地域に波及した。その結果、英国においては一九三一年、マクドナルドを首班とする労働党内閣は労働者階級を裏切って瓦解し、一一

月の総選挙においては、労働党は惨敗を喫した。一方、国際的にはファシズムの波が昂まり、すでに一九三二年以来、イタリアにはファシスト政権が樹立され、一九三一年、日本の中国東北地区への侵略、一九三三年ヒットラーの大蔵大臣就任、翌三四年大統領就任、翌三五年イタリアのエチオピア侵略、一九三六年にはスペイン内乱と、世界は急速度にファシズム化への方向を辿った。ヨーロッパおよびアジアにみなぎるファシズムの脅威に抵抗するために、英国においてもファシズムと反動と戦争に反対する統一行動を呼びかける「統一声明書」が発表され、スタフォード・クリップス（Stafford Cripps）をはじめ、アナイリン・ベヴァン（Aneurin Bevan）メロー（Mellor）、ポリット（H. Pollit）、マックストン（W. Maxton）、ラスキ（Harold Laski）、ストレーチー（John Strachy）、パーム・ダット（Palme Dutt）等が署名したが、コールもこの人民戦線の運動に積極的に参加したのであって、この当時の労作が、「人民戦線」（The People's Front, 1937）である。こうしたヨーロッパ全体をおそった不安な状勢のなかで、修正資本主義という立場において世界大恐慌を説明し、その克服の道を指示できる唯一の経済学としてのケインズの「一般理論」が一九三六年に出たことは、彼のその後の社会主義的思考方法にたいして大きな影響を与えたのであった。

一九三〇年代のコールにとって非常に重要なことは、ナフィールド・カレッジの建設であった。一九三七年一〇月、ナフィールド卿は、「経済学者、政治理論家、政治研究者と実業家、政治家、公務員および地方公務員との間の橋わたしをするために」、新しいカレッジを建設して、これをオックスフォード大学に寄付するために、敷地と一〇〇万ポンドを提供した。そして、大学総長リンゼー（A.D. Lindsay）が議長となって、大学設立委員が一九三七年に任命され、バトラー（H.B. Butler）が学監に任命された。そしてコールは、エンサー（R.C.K. Ensor）やハロット（H.R.F. Harrod）らとともに六人の評議員（Faculty Fellow）のひとりに選ばれたのであった。

不幸にして第二次世界大戦が勃発したため、この計画は一時頓挫したが、やがて一九四〇年、ナフィールド・カレッジ建設の具体的なプランがたてられ、コールはその責任者に選ばれ、その建設事業と運営に専心した。一九四二年学長バトラーが、ワシントンに英国政府の使節として派遣されたのち、コールはナフィールド・カレッジの学監代理に推された。やがて一九四四年、ナフィールド・カレッジの経営から手をひき、オックスフォード大学チチール・カレッジ（Chichele College）の社会理論および政治理論の教授となった。五四歳のときである。ヨーロッパの大学においては、プロフェッサーのポストが非常に少ないためか、あるいはコールのジャーナリスティックな活躍、それとも労働党左派の理論的指導者としての存在が、オックスフォードの学風と相反発するあるものをもっていたためか、その点は明らかではないが、あれだけの業績をのこしながら五〇歳をすぎてのちようやく教授になったということは、三〇代にして教授に昇進することが普通である日本の大学に比べて、その制度的な差異は別として、何か「学問の厳しさ」というものをわれわれに訓えないであろうか。

一九二〇年代および三〇年代にすでに、コールは、労働運動にユニークな地位をしめていた。彼はその後ほとんど労働党大会に出席したことはなかったが、しかしたえず組合の活動家たちや党の指導者の訪問をうけたといわれる。彼はまた一九四五年に、オックスフォード大学がもつ二つの議席を争う三人の候補者のひとりとして立候補して敗れたのち、多くの公けの活動から離れたのであって、たとえば、一九三九年以来、異常な熱意をもって仕事をつづけてきたフェビアン協会の会長の地位を去ったのである。

第二次世界大戦後のコール教授は、オックスフォードにおける静かな学究生活と著述、そして学生との接触に過ごされたのであって、晩年ともいうべき一九四〇年代になって力作が続々とあらわれたことは興味深い。すなわち、チャーチスト運動に重要な役割を演じた多くの人々の伝記をまとめた「チャーチスト群像」[6]（Chartist Portraits, 1941）をはじめ、労働党の通史としておそらくは最初のものとされる「一九一四年以来の労働党史」（A History of the Labour Party from 1914, 1948）、レイモンド・ポストゲート（Raymond Postgate）との共著で、英国人民の歴史として定評のある「人民」（Common People, 1949）あるいはさきの労働党史の序説ともみられる「英国労働者階級の政治政策」（British Working Class Politics, 1832-1914, 1950）、「社会主義経済学」（Socialist Economics, 1950）、「社会主義社会における英国協同組合運動」（The British Co-operative Movement in a Socialist Society, 1951）、「経済史序説」（An Introduction to Economic History, 1750-1950, 1952）、「ゼネラル・ユニオンへの企図」（Attempt at General Union, 1953）、「貨幣、貿易および投資」（Money, Trade and Investment, 1954）、「階級構造研究」（Studies in Class Structure, 1955）、「戦後英国の状態」（Post-War Condition of Britain, 1956）と、ほとんど毎年大部の著書を出していたその精力は、まことに超人的というほかはない。さらに、一九五六年には、例のライフ・ワークともいうべき大著「社会主義思想」の第一巻が出ている。そしてこれが完成をみることなく、最終巻第八巻の出版を眼の前にして一九五九年一月に亡くなったのである。

(1) この点については、拙稿「イギリスにおける社会民主主義の形成過程（その二）」――帝国主義の時期におけるイギリス労働運動と労働代表委員会――（三田学会雑誌第五三巻第五号所収）

(2) Margaret Cole; Growing up into Revolution, 1949, p. 73.

(3) G.D.H. Cole; A History of Labour Party from 1914, 1948. pp. 102-103.

（4）新川士郎教授、「会う記、会えざるの記」（有斐閣、書斎の窓、第七八号所収）

（5）G.D.N. Worswick; Cole and Oxford, 1938-58. (Essays in Labour History, in Memory of G.D.H. Cole, edited by Asa Briggs and John Saville, 1960)

（6）この書はすぐれたモノグラフであるが、絶版であるのは惜しまれる。

三

今世紀初頭から一九五九年までのG・D・H・コール教授の多彩な活動の背後には、半世紀にわたるイギリス資本主義の変貌と労働運動の苦悶が秘められていた。コール教授の学問的な関心は、この五〇年間に英国資本主義が直面したほとんどあらゆる問題にむけられていたといっても過言ではなかろう。しかしどちらかといえば彼の研究の分野は、理論よりも歴史の方にあり、彼自身も、そこに精力を集中したと思われる。オーエンやチャーチストの研究、労働運動史や協同組合運動史の研究などにおいて、すぐれた業績をなしとげたコール教授は、一体どのような思想的変化を経験し、その理論はどのようなものであったか。周知のように彼の立場を一貫して流れているものは、労働党左派に代表的にみられる非共産左翼の思想である。ただその内容が時代によって多少のニュアンスのちがいがあるだけである。一九三〇年代、コールをふくめて多くの進歩的な知識人が、マルクス主義に共鳴していった頃、彼もマルクスにひかれたのであるが、彼に特徴的なことは、同時にケインズにも大きな刺激をあたえられたことである。「無体系の理論」ともいうべき英国社会主義の伝統を背負っていたコールの思想のなかには、マルクスとケインズとが併存し、それはまたロバート・オーエンとウィリアム・モリスという二人の偉大なイギリス人の社会主義者にたいする信仰によってささえられていた。戦後に出た「社会主義経済学」には、明らかにケインズの影響が認められるし、また注目すべき労作のひとつ、「階級構造論」は、マルクス主義的方法論による分析であるということができる。この意味では、彼もまた、英国という土壌にのみ生まれることのできる社会主義者の一類型であるといえるであろう。

しかしながら、われわれはここで、つぎのような問題に直面する。若き日のギルド社会主義運動にみられた戦闘的精神を、コールはその晩年には失ってしまったのであろうか、いや、そうではない。彼は労働党の政策にともすればみられる右傾化に対しては、依然としてきびしい反対者であった。すでに一九五四年、ニュー・ステーツマン・アンド・ネーション紙上において、労働党が伝統的な平和主義をすてて、西ドイツの再軍備を承認したことに失望し、それが社会主義政党としての信条にもとるものであるとする警告を発したのであった。[1] とくに一九五〇年、朝鮮戦争の勃発によって、「二つの世界」の対立が、冷戦から熱戦に転化したとき、労働党が社会化政策や社会保障の犠牲において、軍備の拡充という新しい冒険にのり出そうとしたのにたいし、やはり、ニュー・ステーツマン紙上において、「これが社会主義か？」と絶叫したことはよく知られている。[2] コールの社会主義的良心は、その死に至るまで脈々として生きつづけていたのである。

ひとは、コールの生涯を想うごとに、理論と実践の問題について深く考えさせられるであろう。社会科学の研究に志す者は、観想するのみにとどまりうるであろうか。オーエンやコベット、そしてチャーチストの群像を描きつつあったコールの胸のなかには、大衆的革命的な運動の先駆者とそれにひきいられる名もなき大衆にたいする深い愛着が、おそらくはあつく燃えていたにちがいない。それでこそわれわれは、彼のギルド社会主義者としての実践の必然性と苦悩とを理解することができるであろう。コールが、ひとりのインテリゲンチャとして、ギルド社会主義に専心していた第一次世界大戦前後は、丁度現在のわれわれがおかれているような不安と動揺が、イギリス全体をゆりうごかしていた時代であった。われわれはいま、日本の民主主義の危機に際会し、議会政治の崩壊、官憲の平和的な大衆運動にたいする残酷な弾圧そして流血事件を体験してみて、はじめてコールが、実際運動に身を投ぜざるをえなかったその心情をよく理解することができる。

コールの生涯は、われわれに二つのことを訓える。ひとつは、いうまでもなく理論と実践の問題であり、いまひとつは、およそ学問に志す者にとって不可欠のもの、すなわち「あくことを知らぬ探求の精神」、これである。

（1）New Statesman and Nation, January, 1954.

（2）この点については、コール著、山川菊栄訳「これが社会主義か」（河出新書）を参照。

*　*　*

G・D・H・コール教授主要著作

1) The World of Labour, 1913.
2) Self-Government in Industry, 1917.
3) Chaos and Order in Industry, 1920.
4) Guild Socialism; A Plan for Economic Democracy, 1920.
5) Guild Socialism restated, 1920.
6) The Future of Local Government, 1921.
7) Trade Unionism and Munitions, 1923.
8) An Introduction to the Trade Unionism, 1924.
9) Robert Owen, 1925.
10) Life of William Cobbett, 1927.
11) The Next Ten Years in British Social and Economic Policy, 1929.
12) Gold, Credit and Employment, 1930.
13) British Trade and Industry, 1932.

14) The Intelligent Men's Guide through World Chaos, 1933.
15) Principles of Economic Planning, 1935.
16) People's Front, 1937.
17) British Trade Unionism Today, 1939.
18) Chartist Portraits, 1941.
19) A History of Labour Party from 1914, 1948.
20) A Short History of British Working Class Movement, 1948.
21) Common People, 1949.
22) British Working Class Politics, 1832-1914, 1950.
23) Socialist Economics, 1950.
24) The British Co-operative Movement in a Socialist Society, 1951.
25) An Introduction to Economic History, 1750-1950, 1952.
26) Attempt at General Union, 1953.
27) Money, Trade and Investment, 1954.
28) Studies in Class Structure, 1955.
29) Post-War Condition of Britain, 1956.
30) Socialist Thought, 7 Vols. 1956—1959.

——一九六〇・七・一五——

《追記》

本稿は、六月三〇日の慶応義塾経済学会における報告に修正加筆したものである。席上、御教示を賜わった高木寿一、小池基之両先生および加藤寛氏の御好意にたいし、紙上をかりて厚く感謝の意を表する。

メテリの検出

渡邊國廣

一

今日フランスにおいては、一般に、メテリ métairie をボルドリ borderie と対比させ、ボルドリを十ヘクタール以下の貸付地、メテリを十ヘクタール以上の貸付地としている。貸付の規模によって区別する方法である。

また今日では一般に、土地所有者と耕作者の間で収穫物を配分する貸付地を、メテリと呼んでいる。この意味においてメテリは、耕作者が土地所有者に対し貨幣で地代を支払う貸付地ファルム ferme と対比される。地代支払の形態による区別といえる。いわゆる分益制 métayage と小作制 fermage なるものの違いがそこにあった。

以上のことから推し、今日厳密にメテリとは、面積が十ヘクタール以上で、収穫物を土地所有者と耕作者の間で配分する貸付地といわなければならない。しかし一般には、収穫物を土地所有者と耕作者の間で配分する貸付地であれば、その規模にかかわりなく、メテリとして扱っている。現在フランスにおいては、かかる貸付地としてのメテリが、地方により複雑な内容を示しながら、ほとんど全土にわたって散在し、とりわけ中部や西南部に集中的にみられ、場所によっては耕地の圧倒的部分がメテリで占められている。最近の調査の示すところをみよ。近時それを廃止しようという強い要求があった。しかしメテリはフランスにおいて今になお存続し、増加の傾向すら示している。

しかし中世の全体を通じ、フランスの大部分の地方はメテリを知らなかった。その採用は若干の特殊な場合に限られていた。耕作者の収穫した生産物の一定部分によって土地の上級所有権に報いるというこの慣行は、ローマ法においてはやくから親しまれて来たところであったが、フランスにおいて一般化したのは十六世紀以降で、領主財産の危機を直接の契機としてであったのである。

ところで問題は、そういったローマ以来の慣行が、歴史の特殊な